

カナル



作 * 天心一心

画 * いはゆるわんこそば

第一章	プロローグ
第二章	電車の中
第三章	わが家へ
第四章	愛犬
第五章	散歩
第六章	広場
第七章	カレー
第八章	庭の生活
第九章	友達
第十章	年賀状
第十一章	誕生
第十二章	家出
第十三章	オサム
第十四章	ハルカ
第十五章	蜘蛛
第十六章	終章



【第一章 プロローグ】

カラコロ、カラコロ、カラコロン...

暴れまわる赤いランドセルにしがみついて、鈴が激しくなっている。

「やばいよ...！」

群青色のハイソックスですっぽり覆った細い両足が、懸命にアスファルトを蹴った。

白い吐息も小刻みに揺れている。

急がないと、またホームルームに遅れてしまう。

オサムのいじわるな顔が目には浮かんだ。

「また遅刻してるのは近沢で～す。こそこそはいつてきま～す」

わざと教室中に声をはりあげるのだ。

ドアのすき間からこっそり滑りこめば、教壇にいる先生にも気づかれずに机にたどり着けるのに。

オサムの「サイレン」のおかげで一分も遅刻できない。

ぜいぜいとどの奥が悲鳴をあげる。学校まであと数メートルというところで、校門前の交差点で青信号が点滅を始めた。

「ああもう、今日ってついてない...」

それでなくても、今朝はイライラしてるのだ。家を出る前に、またパパとやりあってしまった。

というより、一方的にパパをなじってしまった。

カナコは6年生になった頃から、パパを疎んじるようになっていた。

理由のひとつは、パパとカナコの「親子の証」にある。パパとカナコの鼻は、座りがよい、という点で、相似形をなしていた。

鼻筋は目立たなく、スキーのジャンプ台のように突然立ち上がり、丸いループを描いて「でん」と着地する。

パパは昔から、

「どうだ、堂々として男らしい鼻だろう」

とむしろ誇らしげだった。

幼い頃はカナコも、丸い鼻を幸運の授かりものと信じていたが、11年も女の子をやった今ではもう、そうはいかない。

_____ だまされていた。

「男らしい」鼻を恨んだ。

夜な夜な洗濯バサミで鼻筋をつまんで激痛に耐えた。一日に何度も鏡を見る年ごろだ。

でも、何度見ても丸いものは丸い。

「パパの子じゃなければよかった」

突然フキゲンを口に出して、パパや、ママの顔まで曇らせた。

でも、本当は鼻だけが原因じゃない。パパの存在自体がなんとなく、どうしてもイヤなのだった。

昔はパパが大好きだった、と思う。「パパのお嫁さん」志望だった頃は、よくママにやきもちを妬いたりしていた。

休みの日には、朝寝坊したいパパの体中をいじくりまわして、寝かしてはおかないのだった。

パパが近くに存在しているだけで、カナコの心には特別な一日だった。

それが今ではカナコが避ければ避けるほど、逆にパパの方が追いかけるようになり、

それがますますカナコの癪に障る。

今朝のパパの失敗は、朝のシャワーでうっかりカナコのバスタオルを使ってしまったことだ。

「パパ、やめてよっ！汚いっ！」

普段はあまり感情を見せず笑顔をくずさないパパが、このとき、反応した。

「...親に向かって、汚いとはなんだ」

努めて抑えようとはしていたが、パパの寂しい怒りがカナコにも伝わった。

なおさら感情が煽られる。

「だって、私のタオルじゃないっ！パパが悪いのよ、汚いっ！汚いっ！」

「パパは汚いのか...」

ママが助け舟を出した。

「こら、カナコ」

3人の真剣な空気が急に面倒くさくなって、くるりと背を向け、

「もう、いいよっ！遅刻するからっ！」

捨てゼリフを叫ぶなり、家を飛び出したのだった。

_____キンコンカンコーン。

とうとう小学校では始業のチャイムが鳴り始めた。

どうにか青点減は続いている。

_____いけるな。

群青色の両足は勢いを速めて、交差点に飛び込んだ。

_____キーッ。

天をつんざくヒステリックなブレーキ音を最後に、カナコの記憶は停止した。

【第二章 電車の中】

目が覚めると、カナコは横がけのシートの上で揺られていた。動いている電車の中、らしい。

_____ゴーツ。

窓の外が暗い...黒い。地下鉄、...？

いや聞きなれたあの轟音とは響きが違う。つぎめのない、永遠に続いていく滝のように長い音。

頭の中が懸命に理解を試みる。

_____ホームルームは始まっちゃったよね？

ランドセルは背中にあった。鈴がカラコロ、コラン、と鳴る。

いつもと変わらない鈴の音を聞いて、ほんのちょっと安堵する。

窓から外をのぞくと周りには、線路もトンネルも見えない。電車は轟々とうなりながら、永遠に広がる黒い闇にすっぽり包まれていた。

その瞬間、点滅する青信号と、ものすごい勢いで目の前に迫ってくる車のナンバープレートがカナコの脳裏に映し出された。

_____そうだ私、車にぶつかったんだ。

突然、記憶のシナプスがつながった。

「これは、天国に行く電車なのかもしれない...」

それでもまだ、怖くはなかった。

落ち着いて中を見回すと、横に長く伸びたシートの遠い端に大人の男が座っている。

スーツ姿に、つばのついた帽子を目深にかぶって。

懐かしのドラマとかで見る「モーレツ時代のサラリーマン」みたい、とカナコは思った。

こちらを気にかける様子はない。

カナコは立ち上がって、揺れる車両のバランスを取りながら男の方に向かって歩いた。

「あの、すみません。おたずねしますが」

男は顔をあげてカナコを見た。

「これは、どこに行く電車ですか？」

_____パパよりはちょっと若いみたい。

「君は、知らないで乗ったんだね」

「はい、車にぶつかって...気がつくと、ここにいたんです」

「なるほど不慮のパターンだね。端的に言うとなつまり、君は死んだんだよ」

道をたずねられあきた交番のおまわりさんのように、さっさとしている。

「うそだよ、こんなにはっきりしているよ。足だってあるよ」

「そう、君の言うとおりの。正確にはあちらで下車するまでは、死んだことにはならない」

「あちら...やっぱり天国に行くんだ」

予想はしていたものの説明されると、やはりがっかりした。

「天国？ああ、現世ではそういうね。本当はちょっと違う。そこでは人間の身体から抜けた魂が、新しい形の生き方を始めるんだ。魂といっても人間の頃の記憶はない。まったく別の次元で生きていく」

「どういう次元？」

「人間が使うあらゆる言葉でも知識でも想像できない。人間の考えうるすべてを越えた次元だよ」

「パパとママや友達のこととも忘れるの？」

「むろんだ。人間の頃のすべての記憶も、人間だったことすらも消え去る」

瞬間、カナコは理解を拒んだ。

「私、行かない」

「...それはできない。この電車に乗っている間は、記憶は人間だった頃のままでいられる。だけど、肉体の方はすでに消えてしまっているんだよ」

「おじさんも死んだばかりなの？なんでそんなに知ってるの？」

「ぼくはね、現世で亡くなってこの電車に乗った人々のために心の案内をしているんだ。まあ大概亡くなった直後の人間は、自分がどうなるのか不安でいっぱいだからね。泣きわめく人や、パニックを起こしてこの電車から飛び降りようとする人もいる。でも一度この闇に吸われたら、不安の塵となって消える。理由も終わりもない...そこで僕は案内するのさ。死は恐怖ではなくて、次の生へのステップだということを教えて安心させてあげるんだ」

カナコは全身のエネルギーを集中させて、話を聞いていた。男は続ける。

「覚悟を決めて死を迎えたり、ここに来た瞬間からすべてを悟ってしまう徳の高い人もたまにいるけど、そういう人々はぼくに声をかけてこない。案内の必要がないからね」

「案内人は、永遠にこの電車に乗り続けるの？」

男の冷静が一瞬くずれた。

「するどいね。君は最後の1人なんだが...しかたない。聞かれたことには答えるのが案内人のルールだ」

「最後のひとり？」

男はなぜかゆがんだ表情になった。

「実を言うと、ここで1000人の人に案内をすると、一度現世に戻る権利が手に入るんだ。

君はめでたい1000人目というわけさ」

「じゃあ、おじさんは現世に戻るのね」

男の顔は少し緊張してるようでもある。

「当然、たくさんの制約がある。元の人間の姿では戻れない。今さら現れてもみんなお化けが出たってびっくりしちゃうからね。人間以外の何かでやっていくしかない」

カナコは、頬を紅潮させて叫んだ。

「カナコも1000人の心の案内する！」

男は気の毒そうにかぶりをふった。

「かわいそうに。心の案内人には15歳になってなければならぬんだよ。君はちょっと死ぬのが早すぎた」

輝いたカナコの目が、一瞬でよどんでしまった。

「じゃあ、どうしようもないってこと？」

男は答えない。目をそらした弱気に、カナコはすかさずつつこんだ。

「どうしようも...ある？」

男の不安は的中した。案内人の規則では、聞かれたことには答えなければならぬのだった。

男はカナコの機知を恨みつつ白状した。

「君は実に勤がいい。権利は譲ることができるんだ」

カナコの目がふたたび輝いた。

「ただし」 問答無用に男は続ける。僕だって望みは捨てないぞ、とでも言うように。

「新しい身体に満足しなければ、つまりその身体に与えられた寿命、宿命をまっとうせずに放棄すれば、今度は魂までも消滅する」



カナコはすぐに理解できなかった。

「自分では新しい身体を選べない。蟻やダニに生まれ変わることであるんだよ」

現世で生を受けるものの種類は、無限大なのだった。

しかし男の期待を裏切って、カナコはひるまなかった。どうしても現世に戻らなきゃならない気がするのだ。

「新しい生をまっとうしてみる。せっかくのチャンスだもの」

男は首を横に小刻みに振りながら言った。

「君はまだ考えが甘いようだ。が、君の申し出に逆らう権利は残念ながら案内人にはない。あゝしかたない、権利を譲ろう」

カナコは急に、男に申し訳ない気になった。

「でも、でも、おじさんもまた現世に戻るチャンスがあるんだよね」

「譲ったらまた、心の案内は1人目からやりなおしだがね。おまけに僕の説明に案内されずに無茶をする人がいたら、何度でもまた一人目からやりなおしなんだ。これまで延べ10万人はかかったよ」

男もまた、カナコと同じ、いやそれ以上の決意で現世に戻ろうとしているのだ。

「享年11歳のカナコさん。戻っておいで、現世に」

男は力なく微笑んだ。

「ありがとう。でも、ごめんなさい」

「いいんだよ、10万人に案内してきたんだもの。あと1000人なんてもう同じさ。さあ、次の停車駅で降りなさい」

電車は、シューとガスを抜くような音をたてて勢いをゆるめた。

完全に停車すると、男はいつのまにか大きなポリタンクを手に持って立ち上がった。

「これは君の命のエネルギーだ。これが尽きたとき、君の新しい身体も終わる」

男はランドセルの赤い蓋を開いて、トクトクとエネルギーを注いだ。粘着質の液体は、目がつぶれるほどの鋭い光芒を放ってカナコの背中に吸い込まれていった。

「さあ」

男の声に励まされ、カナコは開いたドアから飛び出すと暗闇の中に溶けた。

やっと目が慣れてくると、降り立ったホームの端に階段が続いている。

カラコラカコラ...鈴の音がカナコと一緒に歩いていく。一段一段上にあがると、行く手の頭上にぽっかりと明るい出口が現れた。

光の先にあるのは、カナコが住んでいた町だった。

【第三章 わが家へ】

カナコは町へ滑り込むと、まぶしそうに天を見上げた。

空が高い。家々が高い。なんだか以前より視界広い気がする。

最初の歩を踏み出すと、4つの手足が同時に動いた。カナコははじめて全身が白い毛で覆われていることに気がついた。自分は白い犬だった。

歩き出すと、耳元で音がした。

_____カロコラ、カロコラ...

ランドセルの鈴は、いつのまにか首輪にしっかりとくくられていた。まるでカナコの一部であるかのように。カナコはもはや身に起こるすべてのことに動じなかった。与えられた自分の姿を、感謝して受け入れた。

子犬のカナコは、通いなれた道を一目散に家に向かった。身体は小さいが、走るのは人間の頃よりずっと速く、自分でも驚く。あつという間に懐かしい家の玄関の前に着いた。

懐かしいといっても、家を出た朝からいったいどれくらい時間が経ったのか、カナコには見当がつかない。

家の奥から、線香の重たい匂いが漂ってくる。

今すぐ中に飛び込んでいきたい、パパとママの顔が見たい。だけど、わが身は犬の姿である。

四つの足で立ちつくしたまま途方に暮れてしまった。そのとき。

_____ふーっつ。

頭上から威嚇する鼻息の急襲だ。見上げると、隣家の塀の上でぼた餅のごとくまるまる太った三毛猫が全身の毛を精魂かけて逆立てて、ギギギとにらんでいる。

その姿を見て、なぁんだ、と力がぬけた。

動物好きだったカナコは隣家の猫をすっかり手なずけていた。

「やだ、三太郎ったら。カナコだよ」

とはいえ当の三太郎は、天敵なはずの目の前の犬が、いつも給食のチーズを残して分けてくれていたカナコとは、夢にも思わない。

猫なりに本気で威嚇してるのだが、このチビ犬はなんとも友好的な様子でこちらを向いてしっぽを振っている。生意気な、と思うが、チビの余裕に気おされてジリジリと後退する三太郎である。

_____カロコラン...

振ったしっぽと一緒にカナコの首で鈴が揺れた。と同時に、懐かしい声が三太郎のどこかに響いた。「カ、ナ、コ、だよ」

思わず、にゃっ！と叫んだ三太郎の驚きの声の方も、心の言葉になってカナコに伝わった。

「うそっ！カナちゃん?!」

三太郎に心の言葉が通じるようになると、カナコは大いに心の頼りを見つけたのだった。

それからカナコは夢中になって、事故のこと電車や男に出会ったぜんぶを話した。猫と人間とは、「死ぬ」という感覚が違うようで、三太郎にはカナコが犬の姿に変わって帰ってきたという理解しかできない。でも、カナコが自分と同じ飼われ者の境遇になったことは認識していて、家に入れない事情は察しがついた。

「三太郎、私、パパとママに会いたいよ」

「うん、カナちゃん。それも、うまいことやって飼ってもらわなきゃにゃん」

こういうときは犬より、猫の方が自由が利くとばかり、ひゅると塀から姿を消した。いったい何を思いついたのか、しばらくするとどこからか段ボールの箱を口に加えて引っ張ってきた。

猫の身体には重労働だったに違いない。きれぎれの息で言った。

「ふうふう、ほら、カナちゃん、この中にはいるんだ」

なんだか自信たっぷりの三太郎の言うがままにカナコは段ボールの中に収まった。

三太郎はまた塀を越えて、今度はカナコの家の中に滑り込むと、ちょっと早めの盛りがついたような

大声で鳴きだした。

「にゃ～おん、にゃおん、にゃ～お～ん」

とうとう何事かとママが庭に顔を出した。

_____ママだ！ママ、ママ。

カナコの身体が熱くなる。ママの頬は以前よりやせて影が見える。顔色も青い。

ママは昔カナコがしたように、三太郎の両脇に手のひらをさしこんで、もったりした猫の身体を持ち上げた。さっきまで威勢のよかった三太郎は、ママに抱かれてもう赤ん坊のようだ。

「どうしちゃったの、三ちゃん。甘ったれて」

ふと見ると、玄関先に見慣れぬ段ボールがおいてある。ママが中をのぞきこむと白い子犬が情けない顔で見上げていた。

_____くーん。

「まあ、首輪がついてるわ。でも、段ボールに入れられてるってことは...捨て犬かしら」

しゃがみこんで子犬の頭をなでた。

計略どおりに事が運んでいる。三太郎は、どうだ、と言わんばかりにママの腕の中でカナコを見下ろした。

_____カロコラン...

子犬の首輪が鳴った。鈴の音がママの心のどこかに響いた。急いで子犬の首を確かめる。あの鈴に、あの音に似ている...

やがてママは子犬のびい玉のような瞳を見つめなおして、つぶやいた。

「どうせ、飼い主はもういないんだよね」

会社から帰ってきたパパは、家ではしゃぎまわる白い子犬を見るなり、悲しい暗い顔になった。うるさいほどに暴れる鈴の音は、カナコがいた頃に戻ったと錯覚するほど、パパの心に染みついている音だった。

「だめかしら」

飼いたいという申し出たママは、予想外のパパの表情にとまどった。

「だめじゃない。だけど...この犬はまるでカナコの生まれ変わりのようだね」

というなり、急にパパの目がみるみる涙であふれて、はらはらと頬をつたった。

今度はママがどぎまぎしてしまった。パパはカナコがいなくなったときですら、涙を見せなかったからだ。

それは我慢していたからではない。カナコの死と悲しみを何が何でも信じようとしなかったのだ。

泣いたら、すべてが現実になってしまう気がした。それが今、どういうわけか子犬の存在がはじめて事実を見つめさせた。

その晩ふたりは、せきとめられていた悲しみをすべて流そうとするかのように、号泣しつづけた。

【第四章 愛犬】

カナコは再びパパとママの家の子になった。いや、正確にはカーナと名づけられた近澤家のペットになった。

カナコだった頃よりもずっと、ペットのカーナは飼い主であるふたりに素直になれた。

パパの休日には、週に一度のお風呂にいらしてもらうのが何よりの楽しみだ。パパはパンツ一丁で頭からびしょぬれだが、へっちゃらだ。

カーナの姿はこれまた情けない。お湯につかると、毛でふくらんでいた身体は3分の1に縮まってしまう。

ぺっちゃんとした身体を軽々とつままれて、

「なんだカーナ、着ぶくれしてただけか」

と、笑われる。

ガシガシとパパの太い指で力強く全身を泡立ててもらう。無抵抗のまま耳の裏まで丹念に洗われると気持ちよくて、うっとりする。

目をつむると、人間だった頃の自分が苦く思い出される。

「パパ、目にせっけんがはいっちゃってるよ！痛いよ、痛い！」

「パパがいるとお湯が減ってメイワクだよ！」

カナコがパパと一緒に風呂に入った記憶は、4年生の夏が最後だ。6年になった頃などは、パジャマ姿を見られるのもイヤだった。

うっかり家の中で遭遇したりすると、可哀想なパパは痴漢扱いされた。

3分の1になったカーナの身体は、お次はひょいと桶の中にひたされる。

頭からまると、パパが容赦なくシャワーを浴びせかける。

とっさに身体をぶるぶると大きく奮わせると、シャワーの倍の勢いで白い毛とお湯が飛び散る。

「おいおいカーナ、カンベンしてくれよ！」

パパのほっぺたや風呂場中に白い毛がまき散って、大騒動だ。

カーナの毛がめりこんだ石鹸を持って、パパはなにやら楽しそうにニヤリと笑う。背中をむけてペろり、とお尻を見せたかと思うと、

「見ててごらん、こうやるんだ」

毛のついた石鹸をお尻と腿の間のあたりでこすった。

「ほうら」

カーナの黒い鼻先に出された石鹸は、ほんのふたこすりほどで、きれいに毛がとれている。

パパは成功した手品師のように得意気だ。

「すごい！パパ」

感心してみせてパパを喜ばせたいのだが、カーナにはうまくいかない。

つつつのタイルの上を、爪でがりがり音を立てて回ってみるだけだ。

お風呂のあとは、ママにバスタオルとドライヤーでふさふさの身体に戻してもらう。

ローズのシャンプーのにおいを全身にふんわりまとう。

仕上がった頃、パパは居間であぐらの体勢で待っている。

すでにちょっとパパの目の下は赤っぽい。冷えたビールとセットの塩くるみを歯でポリポリ砕く音が、カーナの食欲を刺激する。

「カーナ！おいで」

ローズの匂いの白い塊は、パパのあぐらの上にダッシュしてもぐり込む。

「ほら」

カーナの口にもおすそ分けの塩くるみがポイと放りこまれてくる。

「昔はカナコもこんな風にあなたのひざの上にのぼってたわね」

「大昔だよ。大きくなってからは、ぼくが3メートル以内に近づいただけでどこかに逃げ込んでしまった」

ふたりの会話が、まどろむカーナの意識の遠くに聞こえてくる。

パパに冷たい態度をとるカナコを見るのは、ママにとっても辛いことだった。

寂しそうなパパを見るのは、もっと悲しいことだった。

「年頃の女の子はみんなそうよ。私だって覚えがあるもの」

カナコがいる頃なら慰めになるはずの言葉も、ふたりきりの居間では虚空に消えた。

パパのゴツゴツしたかかどがカーナの柔らかなお腹にあたって、居心地が悪くなると身体の向きをもぞもぞと変える。

パパの手のひらが、カーナの頭からお尻まで大きく優しく、往復する。

「カーナを見ていると、ときどき急に悲しくなるよ。カナコはもう身代わりしかいないんだってね」

風呂場での楽しい騒動の後のリビングは、かならず少し曇ったような気分に包まれる。

日曜の昼下がりの近沢家は、決まってこんな風だった。



【第五章 散歩】

毎夕は、買い物ついでにママと町に出るのが日課になった。

カーナになってからは、カナコの頃といつもの町が違って見える。目線の位置が違うのもあるけれど、昔は信じられないくらい見逃していた自然のサインが見えるのだ。

4月を迎えたばかりの空気は、ぬるく溶け出している。

春を知った虫たちが騒ぎ始めたときは驚いた。カーナの耳は音の洪水で割れんばかりになって、いったいどんな天変地異が起こったのかと思ったものだ。人間の何兆倍いるのだろう、命の集団の春のざわめき。

_____ざざざざざざ

_____かさかさかさ

「生まれた生まれた生まれた生まれた」

「見つけた見つけた見つけた見つけた」

「食べる食べる食べる食べる食べる」

「逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ」

虫たちの心の声。数は桁はずれに多いけど、言葉の種類は少ないのだ。生きていくための、必要最低限の言葉しか使わない。音にしない。

「今年の桜はいつ開くかしら？」

「子供はたくさん生まれたの？」

カーナがおしゃべりしたくても、虫たちは応えてはくれない。

カナコの通学路だった公園を通り抜けた日は、大銀杏がよく響く太い声をかけてくれた。

樹齢数百年の大おばあさんだ。

「おやあんた、しばらく見かけないと思ったら、元気そうじゃないかい」

「元気そうって...大おばあさんたらよく見てよ、あたしのかっこ。こないだ一回死んじゃって...今度は犬になっちゃったけど、どうにか戻ってきたんだよ」

「おや、そうなのかね。アタシには、あんまり変わってないように見えるがね、どれどれ」

「本当？パパやママはカナコだってこと、ぜんぜん気がつかないよ」

「まあ人間はカタチにこだわるようだからね。命あるものにはみんな心がある。言葉や目に映る身体はそれぞれに違うけど、心だけはみんな似たように持ってる。だから、そこんところを通じさせれば、本当はなんでも伝わるのさ」

「通じさせるのも、結構むずかしいよね」

「アタシャ、なんだかあんたと前より仲良くなれそうだよ。あんたがアタシって心に気がついてくれたからね」

三太郎や大銀杏おばあさんには通じ合えたが、どうもコツがわからない。

しっぽがたれたカーナの様子に大おばあさんはすぐ気がついた。

「おや、どうしたね。悩み事かね」

「パパやママと話がしたいの」

「心で話かけてごらん、こうやってアタシと話せるように人間にだって通じるはずだよ」

「私にはふたりの言葉はわかる。でも、ふたりにとっても私はペットのカーナでしかないみたい」

ママは息吹き始めた木々の新芽を清しい気持ちで眺めていたが、大銀杏の前を動こうとしないカーナにしびれ

を切らして紐をひいた。

「カーナ、もう行くわよ」

仕方なくカーナは大銀杏に挨拶する。

「またね、大おばあさん」

「その大おばあさんってのはやめとくれよ。アタシャまだ人生の半分も生きてないつもりだよ。

ふおっふおっふおっ」

その日から、大おばあさん、ならぬ「大おばさん」はカーナの大切な相談相手になった。

【第六章 広場】

カーナの好きな散歩ルートに、サッカー好きの子ども達が集まる広場があった。放課後になると小学校時代の懐かしい顔々がやってくる。

カナコはスポーツは得意ではなかったが、身体を動かすことは好きだった。クラスの女の子の間ではサッカーが流行っていて、カナコの仲良しは男の子に混ざって走り回る少女たちだった。

ママとカーナに向かって、真っ黒に日焼けした少女がかけよってくる。

カナコの大親友のハルカだ。

ハルカによれば女の子同士が**特別の友達**になるにはルールがあるという。

「それはね、ふふふ...」

おいしそうなくらいこんがり焦げたほっぺたに、可愛らしいえくぼを乗つけたハルカの顔を思い出す。

りぼんをつけた猫のイラストがついたメモ帳を1ページ破いて、カナコに差し出した。

「好きな男の子の名前を、教えあうのよ」

実をいうとカナコは「好き」ってことがよくわからなかった。それで、ちょっと困った顔をした。

ハルカは不満そうだ。

「いいよ、隠したいんだったら」

「そうじゃないけど...」

私はね...言うが早いか、ハルカは猫の1ページをさっさとちぎって書いてしまった。

カナコは差し出されるままに紙を受け取って、中を開くと、

「オサム」

とボールペンで大きく書かれてある。

カナコは目を見開いて、思わず「げ」という表情を見せってしまった。だって、どうして、あんな意地の悪いのを！本当に驚いたのだ。

ハルカは照れ笑いを向けながらも、迫ってくる。

「カナちゃんは？」

我に返ってカナコは窮地にきづいたが、先手を打たれては、好きな人なんていないって逃げるわけにもいかない。

「ケンジ」

と適当にパパの名前を書いてとっさにごまかそうとした。

「ケンジ？どこの？あ、放送委員の？」

「えっと...ひみつ！」

「あっ、ずる〜い！じゃ、私もどこのオサムか言わないもんね！」

カナコとハルカの間で「オサム」は他にいない気がしたが、ともあれそれ以来ふたりは大の仲良しになった。

ハルカはしばらく見ないうちに女の子というより、すっかり少女に見える。

「カナちゃんのお母さん、こんにちは」

「ハルカちゃん、サッカーずいぶん上手になったよね」

「でもまだ、レギュラーになれないんだ」

「そっか。まだ男の子と部活では一緒なんだよね」

「はい。でもウチの学校は女子が入れるだけまし。こんなに男子と実力に差をつけられるとは思いませんでしたよ。小学校の頃は、男の子なんてチビでへたっぴだったくせに」

「ハルカちゃん女子の中じゃうまいのに、悔しいんじゃない」

「でも蹴るの、好きだからがんばるんだ。うちの親は、勉強とか試験のために文科系クラブにしとけていうけど、今は楽しくなかったら、将来のことなんて考えられないもの。そのうち、作るよ！女子サッカー一部！」

陽に焼けたつややかな表情が、ママにはまぶしかった。

過去？思い出？そんなものこの世には存在しないかのように、ハルカはまっすぐ今を向いている。

今が楽しくなくちゃ。その通りだ。今がなくちゃ、将来なんてない。

パパとカナコの顔が頭をよぎる。

『私たちは、そろそろカナコの思い出との関係を、考えなきゃいけないのかもしれない...』

精一杯の笑顔を作って、ママは勢いよくハルカの肩を叩いた。

「うん、カッコイイ！おばさん、ハルカちゃんの応援するわ！」

過去をしまいこんで、未来に向かおうとするママの決意が、カーナには心の言葉となって解った。

_____くーうん。

白い子犬は細い声を出してしっぽをたれた。

【第七章 カレー】

カナコを失った後のパパとママの時間は、無重力の洞穴のようで進んでいるのか、止まっているのかを感じることもできなかつた。カナコの死を信じたくない気持ちが、思い出だけのカナコも、カナコがいない現在をも認めようとしなかつたからだ。

カーナの登場によって、ようやくふたりの時間が変化しはじめた。

やがて半年が過ぎようとしていた。

カーナにとってこの半年は、以前よりずっと温かく素直な日々だった。人間だった頃よりも、まっすぐにパパとママに甘え、降るように注がれる愛情を何のためらいもなく受け入れることができた。

帰ってきた頃、三毛の三太郎とサイズを競っていたカーナは、すでに筋力も体躯も小学三年生ほどのインパクトに成長していた。

決して広いとはいえない近沢家のリビングで3人が一緒に暮らすには、お互いに無理がある。

ママがとうとう切り出した。

「パパ、カーナはやっぱり外の方がいいと思うのよ。大きな新しい小屋を買ってきてあげましょうよ」

「かわいそうじゃないか、ひとりだけ外なんて。汚れてしまうし」

「カーナだって狭いところで身動き取れないよりも、太陽の下で自由に身体を伸ばせる方がずっと楽で気持ちいいはずよ。散歩のときなんかモーターボートみたいにすっ飛んでいくんだから」

窮屈...は当たっていた。日に一度の散歩では、育ち盛りの身体をもてあましていた。とはいえ、この先ずっと、夜を庭でひとりで過ごすなんて。

ママはしっぽがたれたカーナの背中をなでながら、それでも言葉をゆるめなかつた。まるで自分に言い聞かせるように。

「この子はカナコじゃないのよ、パパ。カナコは私たちの思い出の中で生き続ける。だけど、私たちは思い出の中で生きてはいけない...」

カーナの背中の上で、ママの手が止まった。

「カーナはカーナなのよ」

_____ちがうよ、ママ。カナコはここにいる。

カナコの心は叫んだが、「おおん」としかふたりには聞こえない。カーナの泣き声は宙に飛んで、落ちた。

ママの言葉を否定して欲しい、と祈るように振り返ってもパパは何も言わずうつむいてるだけだった。

それから3日後の日曜日。夏に向かう太陽はエネルギーに輝いて、空気の粒子ひとつひとつまで日向干したようにホカホカで気持ちいい。パパとカーナは散歩と休日の解放感を満喫して、汗だくで戻った。

ゴキゲンのママが太陽と同じくらいの大きな笑顔で待ちかまえていた。

「お昼はカレーよ！」

「カレー？暑い日に熱いものってことか、いいね」

「ううん、私、決めたの」

あの晩の翌日から、カーナはママの言うとおりに庭で暮らすことになった。

しびしび承知したパパは、赤い屋根付きの快適な小屋を作ってくれた。窓のないところで初めて寝ることになったカーナにとって、当初、晩は寂しかったが、やはり住んでみると緑と土の上は快適な住処だった。

家の奥から、懐かしい複雑なスパイスの香りが漂ってくる。

リビングでパパとふたりになると、ママは明るい顔を作って言った。

「このカレーね、カナコが亡くなる前の日に、調理実習で習いたてのを作ってくれたものなの。冷凍して、何度か温め直しては冷凍して。これがなくなったら、あの子を永遠に失う気がして、どうしても食べられなかつた」

カナコが調理に取り組みだすと、台所は鶴のおんがえしのごとく禁断の部屋となり、パパはもちろんママすらも追い出されてしまうのだった。

こもりきりの厨房からもれてくるのは、規則正しい機の音とはほど遠い。不穏な匂いや音、ときには叫び声まで飛んできてリビングのふたりをひやひやさせる。

それでも、仕上がりは（見た目はともかく）まずまずで、パパやママは心配した分だけ大げさに感嘆し絶賛し、カナコは得意満面になるのだった。

自分を避けてばかりいたカナコが、このときだけは幼い頃のようにしつこくテーブルにへばりついて、「おいしい」をふたりで何十回くり返しても、まだ納得しない。必死の表情を思い出して、パパは思わず微笑んだ。

_____カナコが作ったカレー。

目をつぶって皿に顔を寄せると、スパイスいっぱいの香りが陽気にささやく。

「ボクタチノナマエワカルカナ イロイロハイッテルヨ シッカリニコンデルヨ」

カレーの方も食べてもらえる日が来たのが嬉しくて、興奮してるみたいだ。

パパはご飯の湯気を封じ込めてしまうぐらいに、小麦粉いっぱいのカレーをたっぷりのつけた。

「いただきま〜す、カナコ」

パパはスプーンがすっぽりはいるぐらいあんぐりと口をあけて、一ロー口かみしめる。

「んんむ、マジで立派なもんだ」

ママは鍋底を、洗ったみたいにきれ〜いになるまでヘラでさらった。

「ほんとね、これなら売れる味ね」

ふたりは涙がちょっぴり混ざったカレーを、ほおばった。



【第八章 庭の生活】

やがて暦は秋を迎えようとしていたが、土と空気の匂いは毎日、毎時間変化しているのだった。
季節が4つしかないと思ってるなんて、
_____まったく人間は勘違いしてるよ。
カーナは冷たい土の上にお腹をぺたりとくっつけたまま、独りごちた。
犬にも人間にもなりきれない心は、自然という大いなる存在の元がいちばん安らげる居場所だった。

庭の住み心地はすっかり身体になじんでいた。

木も草たちも、太陽も、目が合っただけで飛び立ってしまうほど恥ずかしがりやのスズメたちも、生きてる者はやがてみんなカーナの友達になった。

カナコだった頃は大きらいだったはずの虫たちも、今ではユーモアたっぷりの隣人だ。

ごろり、と直径20センチほどの石を気まぐれに転がすと、屋根をはがされた玉虫の大家族は地震と台風と蛇がいっぺんに来たような大騒動になる。

「あっちだ、そっちだ、こっちだ、どっちだ」

「そっちだ、こっちだ、どっちだ、あっちだ」

全員、命からがら右往左往するのだが、事態はまったく好転しない。

カーナはついつい心をそそられて、ツン、と逃げ遅れた一匹の背中を爪でこづいてみる。

白羽の矢にあたってしまった玉虫は、瞬間凍結し、

「玉～！」

と悲劇的な号令を出す。この緊急事態にあっても、玉虫一族の統率力は目を見張るものがある。号令で瞬時に身体を丸めてこちこちの体勢になる。

こうなると、カーナがいくら爪でいじってみても、ウンともスンとも完全黙秘である。パチンコ玉と混ぜても、十分使えるだろう。

するとカーナもすぐ根負けして、小屋にのっそりとひっこむ...フリをする。

本当は気づかれないように横目で様子を伺っているのだ。

しばらく我慢強く視線をそらしていると、やがてどこかの一匹がささやくようにか細く、

「虫～！」

と号令をかける。

カーナの耳が一瞬、びん！と立つ。

と、その一言を待っていた一団はいっせいに丸い玉から虫に戻って足を全開に動かし、あっというまに横倒しのままの石の下にもどっていく。

「くふふ」

毎日、全力でつきあってくれるこの大家族との騒動は、カーナの目覚めの楽しい儀式なのだった。

空を謳歌する鳥たちは、いつもカーナにたくさんのニュースを運んできてくれた。

「公園の銀杏たちは、そろそろ出産が終わる頃だよ」

鳥たちが幹に耳を当てると、きゅるきゅると音が聞こえるのだという。根から吸い上げられた水が、枝葉のすみずみに流れる音だ。栄養が全身にみなぎってゆく。

流れる音の具合で、木の体調がわかるのだ。

カーナは大おばあさん、もとい大おばさんの様子を鳥たちにたずねる。

「今年もずいぶん産んだようだよ」

「もう幹以外は、どこもかしこもまっ黄色だよ」

オバサンの数百回目の赤ん坊である銀杏は、枝から滋養をもらって成熟するとぼとりぼとりと黄色い葉のクッションの上に産み落とされる。葉の間に隠れてしばらくたつと、特別な匂いを発する。

小学校に通っていた頃、その匂いを靴につけていくと男の子に、

「誰か屁っこいたな〜」

とってからかわれた。

_____あれが足の裏にくっつかないうちに、会いにいかなくちゃ。

前よりずっと敏感になったカーナの鼻には、刺すように強烈なやっかいものなのだ。

【第九章 友達】

人間好きのヒバリたちは、よくカーナの庭に学校の様子を持ち帰ってくれた。

「みんなこの頃、サッカーばかりよ」

「勉強ばっかよ」

「ひとりぼっちよ」

「それってハルカと受験するっていった保健委員の子ね」

「当たり」

「当たり」

ヒバリの言葉は単語は少ないが、内容を推測する楽しみもある。

「ひとりぼっち...ってのは」

隣の三毛猫、三太郎がひょいと塀から顔をだした。

ヒバリたちは、ぎょっとして一斉にバタバタと飛び立ってしまった。

「オサムってやつだろ。サッカー部に誘われても来ないヘンクツなやつだって、ニャン吉んとこのお兄ちゃんが言ってたにゃ」

自由に町を徘徊できる三太郎も、カーナにとっては重要な情報源である。

「オサム、今、サッカーやってないんだ」

オサムは乱暴者ではあったが、ひと度ボールを蹴らせると誰も寄せつけず操る姿は、運動音痴のカナコの目にはまぶしく映った。

少しばかり上手すぎるのと、極端に愛想がないせいで他のサッカー少年たちには、仲間はずれにされていた。

実は、ありがとうとごめんなさいの言葉が得意じゃなくて、必要な状況になると心ごと固まってしまう「不器用なヤツ」というのはカナコの解釈だった。

当時保健委員だったケンタくんは、スポーツの神様がうっかり見落としてしまったような子だった。

ケンタくんの動きはいつも他の人が3つ数えたあとから始まり、その動きには人の1.2倍ぐらいのスローモーションがかかっていた。通信簿はいつも限りなくオール5に近いのだが、体育がそこにある限り、彼がパーフェクトを達成することはないだろう。

その日の授業はドッジボールの試合だった。

クラスの男女を「ぐうとばあ」でふたつに分けて、それぞれ混合チームに分かれた。

オサムはエース格である。ボールがオサムの手に移るとかならず、敵が見事にシュートを見舞われて陣地から追い出されることになる。

あっという間に「ぐう」チームの陣地はカナコとケンタくんだけになってしまった。

オサムの中学生級のシュートにあつたら、ふたりにはまず受け止めようがない。下手に避ければ、妙なところに当たるのは目に見えている。

オサムは、カナコやケンタくんのような動きののろい者に対して、適度にボールのスピードをゆるめて投げた。彼らのプライドを傷つけない程度に。のろのろ組みのカナコだからわかる、オサムのやり方。

が、オサムはちょっとカナコを甘く見過ぎた。オサムの加減したシュートをカナコがひょいとかわし、ボールは気の毒なケンタくんを直撃した。

無防備だったケンタくんの顔面で、鈍くて硬い音が弾けた。

_____がしゃん。

ぶ厚い眼鏡が砕けて、ケンタくんの顔から血が噴き出した。見慣れないどくどくとした朱色にクラスメートたちは興奮して騒ぎ出した。

「狙ったでしょ、ケンタくんのこと！」

「わざとじゃなかったって、血が出てるんだから、オサムくんが悪いじゃない！」

正論の旗の下、正義感の女子連が責め立てる。

オサムのはやり方は誰も気がつかないし、気がついてもらう必要もない。そんな高潔な精神が、かえってオサムを必要以上に悪者ぶらせた。

「ごめん、手加減したつもりだったんだけど」

なんて、オサムには口が裂けても言えないのだ。

「保健委員のくせに怪我なんかして、ばっかじゃねえの」

オサムは手に持ったボールを、地面に思い切りたたきつけた。本人が思ったよりずっと勢いよく跳ねあがったボールは、クラスの興奮の火をさらにあおった。

そのときカナコはなんだか判断がつかずに、黙ってたちつくしていた。ただ、漠然ではあるがオサムがひとりで責められるのは間違ってる気がした。

何か言わなくちゃならないという自意識におされてとにかく口を開いた。

「誰かを責めてるより、ほら早くケンタくん、保健室」

「そうだそうだ」と場は急展開しておさまり、あっという間にオサムは放免になった。カナコはほっと胸をなでおろした。

帰り道、太陽の残り陽も消えかかった頃、カナコが小走りに公園を横切ろうとすると、ゴムまりのように勢いのよい黒い塊がギョッと前をさえぎった。オサムだった。

「近沢、かっこつけんなよな」

カナコは一瞬たじろいだが、不思議と急になんだか楽しいようなドキドキがこみ上げてきた。

「かっこなんかつけてないじゃん、オサムがどうとか、私何も言ってないし」

実際かっこつけるも何も考える余裕もなく、現場の対応をただけだ。

「あいつが、勉強ばっかでとろいから悪いんだよ」

カナコの強気に、オサムは急に下を向いてぼそっと言った。

「そんなこと、オサムにも私にも関係ないでしょ」

「お前なんか、うるせえよ」

と言い捨ててそのまま、走り去ってしまった。

カナコは、決して穏やかではない会話だったのに、不思議な温かさが満ちてくるのを感じた。スキップしたい気分が家路に向かった。

今、オサムは行き先のないSOSを出している。三太郎の話を聞いて気持ちは熱くなるのだが、今のカナコ、カーナにはなす術がない。

【第十章 年賀状】

秋の濁いた風がいよいよ、カーナの白い毛を冷たくおおうようになった。

まだ今年は一カ月近くも残っているというのに、家の中はそわそわと落ち着かないようだ。

パパが、窓をあけてカーナを呼んだ。

「年賀状、作るぞ」

ぬれたタオルできれいに足を拭いてもらって、久しぶりにリビングにあがると床いっぱいに葉書が敷き詰められている。

来年は戌年。犬の絵柄の代わりにカーナの足型をスタンプしようというのだ。

パパは自分のアイデアがすっかり気に入ってるようだ。

「へっへっへ」

イタズラをひらめいた少年のように、パパの目は嬉しそうにくるくる回る。

「さてと！」

カーナは小さいバケツいっぱいに溶かれた朱色の絵具の池に足をつけた。

パパがカーナのお腹を抱いて持ち上げると、四本の足の先っちょだけが赤く染まった。

「カーナ、ゴー！」

パパの号令で、カーナは葉書の上をテテテと爪音をたてて歩き回った。

足の指と手のひらの「おまんじゅう」の跡が梅の花びらのように白い葉書の上に舞い散る。

「カーナこっちもこっちも！」

端から端まで夢中になって歩きまくって、あっという間に足型年賀状が何十枚もできあがった。

買い物から帰ってきたママが、目を丸くした。

「あなたたち、何やってるの！」

ほっぺに絵具をつけたパパが、楽しくたまらないとばかりに答える。

「今年のはカーナとぼくの合作だ」

一昨年までの年賀状は、誕生以来恒例のカナコのプロマイド写真だった。

パパ自身、若い頃はこうにはなるまいと思っていた溺愛パターンに、心で苦笑しながらはまっていた。これまで10年分たまった年賀状はカナコの成長アルバムでもあった。

「ほんとにあなたって、カーナを娘とでも思ってるのね」

パパの期待に反して、ちょっと不満げ表情でママは言った。

「来年は、本物の子どもの写真にしましょうよ」

「え...」

「カナコの妹、か弟。来年の今頃にはもうこの家にいると思いま〜す」

ちょっと照れたママの顔。

「今日、確認してきたの」

パパは「え」の顔のまま、声を出すことができなかった。どういう感情で受け止めていいのか、正直わからなかったのだ。カナコ、カーナ、新しい赤ちゃん、自分の心の先はどこなのだろう。

カナコはもういない、という事実を乗り越えて生きていこうとするママの、ぴかぴかした頬がパパの胸のあたりを刺した。

ママが報告している間、すでに風呂場にいたカーナは赤い足を洗い桶につけて遊んでいた。

鮮やかな朱色に染まるほかほかの湯と、パパとの共同作業の満足感に心の底から浸っていたのだった。

【第十一章 誕生】

ママは以前の明るさを取り戻していた。

当初、新しい子どもを受け入れることに複雑だったパパも、日に日に大きくなるママのお腹の中に命の力を感知始めると、その誕生を心待ちにせずにはいられなかった。

ちいちゃな弟を抱いてママが病院から戻ったのは、それから半年の後だった。ママの顔は少女のように紅潮し、目はきらきら輝いてるのか、潤んでいるようにも見える。

カーナは小屋からのそりと身体を現した。じゃらり、と細い鎖の音ができる。パパが近づいてきて頭をなでてくれた。

「スバルっていうんだ。当分はカーナの弟分だから、よろしくな」

カーナには実感がわかなかった。この子は私と同じパパとママの子どもなんだ。でも弟、じゃなくて弟分。呆然としていると、

「赤ん坊なんて生き物ははじめてだから、カーナはびっくりしてるんだな」

と言いながら、パパは庭の水道でカーナに触れた手を念入りに洗った。

それからのカーナの散歩時間は、夕方から早朝に変わった。ママの生活はすべてスバル中心になった。買い物は週末にまとめて一度に行く。

そのかわりパパが通勤の前に早起きをしてカーナの散歩につきあうことになった。

広場でサッカーをする同級生たちの姿を見ることはできなくなったが、パパは公園をかならず散歩道にしてくれたので、大銀杏おばさんとは毎日話をするようになった。

「パパとママはやっぱ人間の姿をしてる子の方が可愛いみたい」

「おやまあ、やきもちかい。まあ、弟や妹ができると誰でもブルーになるっていうからね。ウチの子たちにはないけどね、ふおっふおっ」

大銀杏おばさんの子はいっぺんに星の数ほど生まれるんだから、やきもち妬いてるヒマもないじゃない…。

「でもこの世にカムバックした後だって、あんたは十分にパパとママに愛されてるじゃないか、それに」

_____ おおん。

カーナがさえぎった。

「パパとママがカナコをすごく愛してくれたことも、カナコが死んでどうしようもなく悲しんでくれてることもわかったよ」

大おばさんはかぶりを振って、言葉をついだ。

「それならあんたは望んじゃいけない」

「何を」

「カーナの姿をしたあんたを、パパとママが人間として愛することを」

わかってる。いちばんの望みはもう、叶わない。だから、だから！

「愛されたいんじゃない、私がなんのためにここにやってきたのか。それはなんか他にある気がするんだよ！だけど、自分でもちゃんとわからないんだ！」

いつもの、この世のどんな悩みも幸せも包んでしまうような大きな笑顔で大おばさんは言った。

「それなら、ずっとあたしと話をしようさ。あんたは自分で自分がわからないんだからね。自分を見つけるコツは、自分を自分以外の目で見ることにかぎるよ。あたしはず〜とここにいるから、ゆっくりゆっくり話そうや」

大銀杏おばさんとの問答は、こんな風にカーナの心が大人になる手助けをした。

それからしばらく経ったある日の午後、スバルはママと一緒に日向ぼっこをしていた。

カーナとさんざん遊んだパパは、石鹸で念入りに手を洗っている。うとうとしていたママも水の音で目を覚まし、タオルを取りに奥に入ってしまった。

カーナはスバルをじっと見つめた。

丸い鼻はパパ似、いや、カナコにも似ている。これは私の弟。この不思議な感じ、まだ慣れない。

近づいて匂いを嗅いでみた。

粉ミルクをまぶしたようなぼわぼわの匂い。なんてもちもちのほっぺたなんだろう。すう、すう、すう、規則たたく寝息に合わせて身体がふくらむ。

顔にくらべると耳は大人みたいに大きくて立派だ。にごりのない細い血管が透けて見える。大福のような丸い手。先にチョンチョンとおいた桜の花びらのような小さい薄い爪。清潔な汗にぬれて、細い髪がはりついた額...を思わずなめた。その瞬間。

「ぎゃーっ」

一体この小さな体のどこから、天を突き破るほどの音が発するのだろう。体中をわれんばかりに響かせて、スバルは泣いた。

パパはあわててかけ寄り、びしょ

びしょの手のままで、音の塊を抱きかかえた。

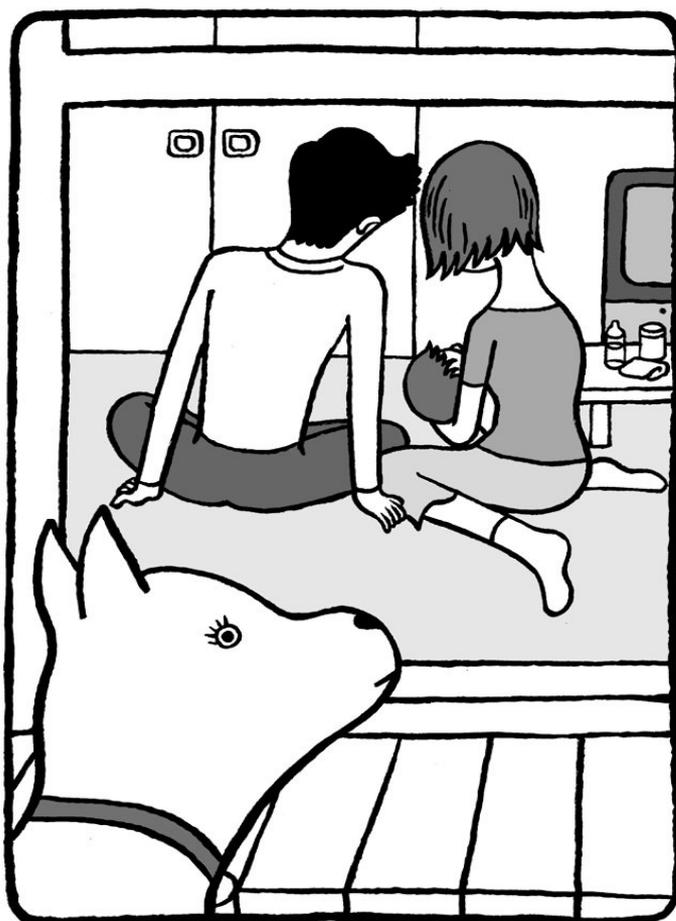
ママは全身から血の気が引いた青い顔で庭に走りでてきた。

カーナは、悲しい犬のカーナは、猛烈な勢いで空に向かって吠え立てていた。

突然のサイレンに、犬の身体が反応してしまうのだった。

スバルの泣き声がおさまると、カーナの方を向いた3人は、ひとつのまとまったオーラを放っていた。

彼らはなにも言わずに家の中にはいった。気がつくや、カーナはひとりぼっちになっていた。



【第十二章 家出】

カロコラ、カロコラ...鈴の音まで頼りなく、しっぽをたれてしまったようである。

そのまま家を静かに飛び出したカーナは、沈んでいく太陽が気の毒そうに見守っているのに応えることもできないで、ただ4つの足を動かしていた。

そして知らず知らずのうちに夕暮れのサッカー広場にたどりついた。

サッカーっ子たちが走り回るのを見るのはスバルの誕生以来だった。

ハルカや仲良しの女の子たちの姿はない。中学生になったクラスメートたちは、みんな部活に入って、グラウンドでボールを追いかけてるのだ。

広場でかけまわる集団を遠めに眺めていると、見慣れない小学生たちの中にひとときわ身体の大きな少年がまざっている。

_____オサム！

骨格は見違えるほど立派になっていたが、一文字につながった勝気な眉はまちがいなくオサムだった。

学校帰りにはまだちょっと早い。やはり中学のサッカー部には参加していないのだろうか。

_____三太郎ならきっと知ってる！

以前、三太郎がオサムの話をしていた。

オサムのために何がしたい。犬のカーナができること。小さな目標を見つけて、心が弾んだ。

夜になるとカーナは鈴の音をたてないようにそっとパパとママの家の近くまで戻った。

三太郎は、隣家で起こった小さいけど深く重い事件のことを一部始終見て知っていて、カーナのことを心配していた。

カーナの姿を見ると、あやうく塀からすべり落ちそうになって安堵した。

「ああカーナ、無事でよかった。でも戻ってくるとは思ってたにゃ。なにせ、あの世からも帰ってきたくらいだからにゃ。パパやママに心配かけて、もう」

「ちがうんだよ、帰ってきたんじゃない。あんた、オサムがこの頃どうなってるか知らない？」

「オサム？ああ、あのヘンクツものね」

三太郎は、あんたは今それどころじゃないだろう？と言いたげだったが、

「相変わらず中学のクラブには行かず、友達もまったく作らずに終業のチャイムとともに学校から飛び出すみたいだにゃ」

「さっき広場で小学生とサッカーしてるの、見かけたんだけど」

「そそそ。それが不思議で、小学生には大人気なんだにゃ。学校さぼってサッカー教えてるんにゃ」

「そんなんじゃないだめだよ。自分から逃げてる！」

「おせっかいなこと言うにゃ。学校ばかりが人生かにゃ」

昔、ハルカや友達と「登校拒否」のことを話したことがあった。カナコのクラスでも家から出てこなくなってしまう子がいたからだ。そのときカナコは、

「だけど、学校に来ることが絶対にいいなんてことないんじゃない。よく、塾の方が楽しいとか、勉強が身につくっていう子だっているし」

今の三太郎のようなことを言った。でも今は思う。

「他の人生をちゃんと見つけようとしてる子ならいいよ。だけど、オサムの場合はみんなとサッカーやりたいし、本当はひとりが寂しいに違いないんだよ」

「ずいぶんと自信あるんにゃ」

オサムは人を必要と思える人間なんだ、とカーナは思う。

そういうオサムにとって、学校ってところは捨てたもんじゃないはずだ。

「犬のカーナだって何かできるかもしれないじゃない」

「いいけど、自分はどうするんや？野郎のことを気にかけてる場合にや？パパもママも元気ないにや」
カーナのお腹のあたりがまた、ずん、と重くなった。

「あたしは、当分公園の大おばさんのやっかいになる」

「わかったよ。まあ食べ物は俺がどうにかするにや、がんばるにや」

するりと塀の向こうに消えた三太郎が、夕暮れに持ってきてくれた食料は、捕らえそこないのトカゲのしっぽだった。

【第十三章 オサム】

それからしばらくカーナは、オサムの後をそっと追ひ、近づくチャンスを待っていた。

三太郎の友情と努力で一応は胃にもものを入れることはできたが、白い身体は家を出てから目に見えてやせていった。そもそも犬の生まれでないカーナには、自然の中でエサを得るだけの処世術も、身の軽さもなかったのだ。ママに連れられて広場に散歩にいったカーナの面影はもうなかった。

マンションの玄関の前で、うずくまる骨ばって薄汚れた白い犬を見たとき、かつてゴム鞆のように元気に広場をはねまわっていた、あの近沢家のカーナとは、オサムはまったく気づかなかった。

「お前、家出してきたのか？ここはマンションだから、僕も助けてやれないんだよ」

カーナはやっとのことでオサムに声をかけられて嬉しくてしゅん、しゅんと鼻をならした。そのとき、
_____カココラ、カココラン。

ゆるゆるになった首輪についた鈴が揺れた。オサムはカーナをはっと見た。

「それって、近沢の...お前、あのウチにいた犬か」

カーナは懸命にしっぽをふった。

「お前、見覚えちゃったなあ。どうしたんだ」

温かいミルクと、段ボールに毛布、そしてカナコには見せてくれなかった優しいオサムのまなざしがカーナを迎えてくれた。

「お母さん、この犬の面倒しばらくうちで見たいんだけど」

オサムのお母さんは眉間にしわを寄せて、困ったように言った。

「ここはマンションだし、あなたは部活で帰りが遅いのに、留守の間家の中に犬を閉じ込めとくなんてかえって可哀想よ」

オサムはサッカー一部の練習で遅いことになっている。終業と同時にとっとと飛び出して小学生の相手をしてるなんて、心配するにちがいないからだ。

「大丈夫だよ。ほら二階の増田さんとこも、4階の平岩さんとこも猫とか犬とかいるじゃない。僕、朝夕必ず散歩に連れてくからさ」

日ごろあまり無理をいわないオサムが、めずらしく主張する。父親を早く亡くしていることがオサムの心を寂しくしてのではないかと気にかけていたお母さんは、オサムの熱意についに折れた。

「もしご近所に迷惑がかかるようになったら、あきらめるのよ」

カーナとオサムは夕方になると、毎日一緒に広場にでかけた。オサムが子供たちとサッカーをしている間、カーナはポールにつながれて待っている。みんなと一緒に走りたくて、ポールの周りをぐるぐると暴れると、ひもが身体に巻き付いて身動きが取れなくなる。

オサムが戻ってきたときには、がんじがらめの情けない姿だ。

「バカだなあ、ははは」

広場で見せるオサムの笑顔はいつも明るくて、晴れ晴れとしていた。その表情を見るたびに、カーナは同級生には背を向けてしまうオサムをどうにかしなくては、と思った。

家でのオサムは、完璧なまでに良い息子だった。仕事から遅く帰ってくるお母さんを、文句ひとつ言わず笑顔で迎える。育ち盛りには空腹は耐えきれないので、夕飯の半分はすぐチンできる店屋物だったり、ときにはオサムが自分で作るインスタント食品で品数を助ける。

「家ではずいぶんイイコなのにね」

大銀杏おばさんの横を通るとき、散歩ひもを引っ張って主張すると、オサムは立ち止まって時間をくれる。

「イイコすぎるのかもしれないね」

当のオサムは会話が聞こえない。目の前で大おばさんと話し始める。

「親に対してイイコすぎて素の感情がなんなんだかわからなくなっちゃったんじゃないかねえ」

「素の感情？」

「子どもはね、自分の生の気持ちを人にぶつけたとき、相手はどう反応するのかって経験を積んで人との関わり方を学んでもんだよ。わがままをぶつけたら怒られたり、人を思いやったら喜ばれたりさ。その最初の訓練相手が親なのさ。あの子はさ、そこんところでハナっから無理しちゃってるから、相手が他人となるとなおさらどう関係いていいのかわからないんだね」

「親が訓練相手...」

カナコはパパに投げたたくさんの辛い言葉を思い出した。少なくとも自分だって人との関わり方をきちんと学べた気はしない。

「なんで親で訓練するの」

「親ってもんはさ、子供をその存在だけで愛せるもんなんだよ。まだ関わり方が下手で失敗しても、許してくれる相手なのさ...」

残念そうに付け加えた。

「もっとも最近人間は、親の方がまだ訓練が要る場合もあるがね」

「関わるって、愛するって、なんなんだろう。人間にしかできないの？カーナにはできないの？」

「ふおっふおっふおっ。さあてどうだろうね。少なくとも銀杏には関係ないね、まず生きてくことが先決だわい」

「大変そうだけど、人間のそういうとこ、悪くないな」

「どういうことだい」

「愛されたい、愛したいってために、悩んじゃうとこ」

「あんたも貧乏性だねえ、せっかく犬になったっていうのに人間の心配してるなんてさ、ふおっふおっ」

「ねえ、オサムはどうすればいいの」

「さあね。誰かからいい関わり方を教わるしかないだろうねえ。素のあの子と関わりたい誰かから」

大おばさんの言葉で突然カーナにある考えがひらめいた。

「いた！オサムに関わりたい人間！」



【第十四章 ハルカ】

その日は、細い雨が空気を湿らせていた。サッカー広場の土は水を含んでやわらかく、「触らないで」と訴えていた。中学校のグラウンドもきっと同じ具合に違いがない。

決行だ！カーナは好機に心がおどった。

早めに帰宅したオサムは、カーナをビニールシートですっぽりくるんで洗濯ばさみで留めた。雨の日は広場には行かない。カーナのお好みコースにしてくれるのだ。

オサムは広場での運動がない分、散歩の時間を長くしてくれる。カーナはチャンスを逃すまいと、信号待ちで歩みがゆるんだすきに思い切りひもを引っ張った。

「おいおいカーナ、いきなりどうしたんだよ」

カーナは力をゆるめず、オサムをひきずるように中学校の近くまで進んでいった。

校門の近くに「きむらや」という小さなパン屋がある。有名な大きな会社のとは違う。昔からここだけにある店だ。店のおじいさんが作った手作りサンドイッチや、焼きそばの入ったコッペパンなんかがおいてある。パン屋なのに、アイスクリームやガムや文房具までおいてあって、学校帰りの中学生のたまり場だ。

「中学にいったら、毎日きむらやに通うんだ！」

小学生のカナコとハルカはうきうき話をしたものだ。

店の前には、やっぱり...いた。雨でクラブの練習が中止になり、たむろする少女たち。

ハルカは、すぐにカーナの姿をとらえた。

「あれ、カナコとこのわんちゃんじゃない？なんでオサムが連れてんの？」

オサムはカーナにしたがって店まで来たものの、ハルカに声をかけられると、答えずにカーナのひもをひっぱって立ち去ろうとした。カーナは4つの足を踏ん張ってハルカの方に向かおうとするが、オサムの本気の力にはかなわない。

「待ってってば」

ハルカはオサムとカーナを追いかけてきた。

_____オサムはハルカを見ようとしなない。

このいかにも正義感で青春に前向きな同級生は何を言おうというのか。思いやり風なおせっかいや、好奇心を隠しての質問攻めはカンベンだ...

「あたしさあ、こんどサッカー部の副部長になったてか」

照れまじりに、ハルカはおどけていった。

なんだ、オレにクラブに入れて説教か。

_____うざったい。

オサムは表情を変えない。

「だけど、肝心の試合には出れないの。下手っぴだからさ」

まるでカーナがお膳立てをする日を待っていたかのようにハルカは思いをたたみかけた。

「オサムさあ、私にサッカーの特訓してくんない？」

引かれるひものスピードがハッとゆるんだのがカーナにはわかった。

‘オサム’と晴れがましく書かれたメモ帳の字を思い出して、ハルカならどうにかしてくれんじゃないか、というカーナの思いつきは予想以上の勢いで展開していく。

あくる日から早速、サッカー広場にハルカのトレパン姿が加わった。もちろんオサムが素直にハルカの申し出を引き受けたはずはないのだが、否定しないは肯定のしるし、とハルカは勝手に決めつけてしまったのだ。

ハルカが中学のグラウンドで規定の練習時間を終えてやってくると、小学生はちょうど帰り支度をはじめ。小学生と入れ替わり、暗くなってボールの距離がわからなくなるまで、ハルカとオサムは蹴っている。

言葉はほとんどないが、カーナにはふたりの心が会話をしているのがわかった。

みるみるうちに、動きで見る限り男の子と見間違ふほどに、ハルカのボール遣いは上達していった。

3週間後は、町の学区内対抗戦がある。ハルカのクラブにとってはシードを決める重要な試合だ。出場選手の発表は、副部長の役目だった。ハルカはこれまで、監督から自分の名前のないメンバー表を渡されるたびに「私は副部長なんだから」と責任感を奮い立たせたのだった。

おそろおそろ目に入れた表の中に、自分の名前を見つけたハルカが、一番はじめに報告したい相手がオサムだったことは、言うまでもない。照れながら、部員の前で自分の名前を読み上げたときは、ハルカは不覚にもぼったりたまった涙を、頬に落としてしまった。

秘密練習の帰り道、黄金色のフィルターがかかったアスファルトの上に、カーナを真ん中に3つの長い影が伸びている。

「試合に出れて、よかったな」

「まだベンチだよ。この次はぜったいボールを蹴るんだ。だから...もうちょっと、面倒みてよね」
うつむいて、でもキッパリした声でつぶけた。

「私、ずっとオサムが好きだったんだよ」

やっぱりハルカは男らしい...私の方が赤面しちゃうよ、とカーナは下をむいた。

肝心のオサムも、答えない。もちろん、オサムの方だって「もしかして」ぐらいの想像はしていた。

だからいつもちょっと複雑な気持ちでいた。でも、まだハルカの気持ちをちゃんと整理して考えられていない。だから今、何か口に出してしまうと今の関係がくずれてしまうような気がするのだ。

「でも、オサムはカナコが好きなんだと思ってる、いや、思ってたんだ」

ハルカの悲しい訂正を、カーナは静かに受けとめていた。

「あたしね、そんなこともともと気にしてないの。オサムが私を必要としなくても仕方ない。でも私にはオサムが必要だったんだから。それだけはずっと伝えなきゃと思ったんだ。あの日、きむらやの前ですごく緊張してたんだよ。でも、勇気出してよかった。おかげで今私は、オサムにたくさんもらってる」

「オレはサッカー教ええるだけ、じゃん」

オサムがやっと口を開くとハルカは急に照れくさくなって、おどけた。

「じゃ、ないんだな、これが。もういいよ！」



家に帰ったオサムはカーナの頭を触りながらつぶやいた。

「お前も僕を必要と思ってくれてるのかな？」

今までにカーナが見たことのないような、晴れやかな、少年らしい目が輝いていた。ゆっくりと噴出してきた、自信のようなものがオサムの頬を紅潮させていた。

「学校ってどうせ行くなら、マジで行くかな」

カーナは嬉しくて嬉しくて、オサムのひざに身体をこすりつける。

オサムは笑って、優しくカーナのお腹をぽんと叩いた。
「はは、お前はエサをくれる人がいちばん必要なのかな」

【第十五章 蜘蛛】

大銀杏の大おばさんは、カナコがカーナになってあらわれて以来、一年の営みを同じようくり返している。ひび割れた木肌は、空気がゆるんでくると無数のピチピチの緑の芽を息吹き、にじりよる太陽には濃緑の葉を茂らせ、風が乾いてくる頃には黄金のペールで地面をおおう。

ほんの数年の間では、人間の子ども達のように成長することも、動物たちのように老いていくことも、虫たちのように死んでいくこともない。いつでも変わらぬ精力的な大きな笑顔で迎えてくれる。

彼女の生命力と包容力に、カーナは畏敬を感じた。

オサムはやがてハルカに誘われるままに、中学校のグラウンドでボールを蹴ることになった。入部を申し出たとき、オサムの予想と覚悟を裏切って、いや覚悟を理解したからこそ、部の仲間は違和なく受け入れてくれた。

ハルカの方は女子サッカー部の初代部長となり、女子の間では際立った実力で試合を制覇していた。

オサムの毎日の帰宅時間が遅くなって、カーナの散歩の時間はすっかり減ってしまっていた。大銀杏の大おばさんとの会話はカーナにとってますます貴重な時間になった。

「大おばさんは、ずっと歳をとらずに変わらないように見えていいねえ」

「毎日公園を通る人間が心で語りかけるおかげで、ずいぶん人間のことがわかるようになったよ。100年200年前のアタシはやっぱり若造だったね」

「大おばさんにも時間は流れてるんだね...パパとママの時間も流れてる。スバルと一緒に」

「そうだねえ。やっと流れだしたみたいだねえ、ふおっふおっ」

「オサムの時間も動き出した」

「あんたの計略はなかなかうまかったよ、ふおっふおっ」

「でも、動かしたのはハルカだもん」

「ふおっふおっ、ところであんたの時間はどうなんだい」

「私の時間？」

結局パパとママにとって犬のカーナの登場は、ペットとしての単なる慰め役にすぎなかったのではないかな。

つ—————。

そのとき、突然大おばさんの枝から真直線にきらきら光る糸が降りてきた。先っちょにいるのは、直径1センチほどの身体をした蜘蛛だ。

「お嬢さん、この世での首尾はどうですか」

蜘蛛らしからぬ、複雑で品のいい言葉遣いに驚いた。これまで会った虫たちは、単語をくり返すばかりだったから。

「命のエネルギーは...そうか。君は犬のまま使ってるんだね」

カーナははっとした。この世に戻る権利をゆずってくれた、あのおじさんではないか。

「おじさん！戻れたのね！あれから1000人の人に心の案内、成功したんだ！」

「まったくさ。1000人を素直にあちらに案内するのは大変だったよ。挙句、ぼくの命のエネルギーは帽子一杯分しかもってこれなかったら、蜘蛛の身の上さ。でも、構わない。これからすぐに使ってしまうもの」

「おじさん、エネルギーを使うってどういうこと？どうやって？」

蜘蛛は、後ろめたそうに少し上にあがったが、キッパリと言った。

「君はあのとて、僕に聞かなかつた。だから僕は、言わなかつた。新しい身体をまっとうしないとはどういふことか。でも、いいじゃないか、君は立派な犬なんだから。そのまままっとうしたらいい。僕なんか悲しき蜘蛛おじさんさ」

「教えて、新しい身体の寿命をまっとうしない場合、エネルギーはどう使うの？」

蜘蛛はためらいがちに糸を揺らした。

「ぼくはもう案内人じゃない。聞かれても答える義務はないのだが。でも、君はずいぶん大人になったようだから、もう一度自分で判断するチャンスがあってもいいかもしれないね」

「お願い、教えて」

「集中して願って、エネルギーを一気に使い切るんだ。そうすれば一度だけ人間の身体に戻れる。もちろん、今の身体を捨てたからには二度と...この先はもう教えたね。どちらの使い方を選ぶかは、考え次第さ」

言うなり銀色の糸がぷっと切れて、蜘蛛が地面に落ちた。瞬間、目の前に電車で出会った中年男の姿になった。

「僕のエネルギーは少なめだから、急がないとね。では」

一分一秒でも惜しい、という風に去って行ってしまった。久しぶりの人間の姿が気持ちよくてたまらないというように軽い身のこなしで。

「おやおや、この世のどこかで何をするんだろうかね。ふおっふおっ」

大銀杏の大おばさんは優しいまなざしで男の後ろ姿を見送った。少しでもエネルギーが増えるように、精気を送って応援しているようだ。

カーナは大おばさんに向かって、叫んだ。

「カナコの時間、動かすよ」

【 終章 】

駅までの最短ルートをちょっとだけ遠回りするのが、ここ数年の賢治の決まった通勤路だ。

森林公園を抜けて、小学校の校門を通過し駅に向かう。

朝の空気を確かめながら歩いていると、ゴムまりのように元気な小学生の集団がいつもと同じ場所で賢治を追い抜いていく。駆けていく後ろ姿を見送りながら、「気をつけてくれよ」と思わず心で声をかけてしまう。

あの日、そんな注意の言葉をかかえずに娘を送り出してしまったことを、この2年間毎朝悔やみ続けているのだ。

公園の敷地に入ると、樹齢350年の札をぶら下げた大銀杏や見事な枝ぶりのケヤキの樹木たちが清々しい生命力で迎えてくれる。一人娘を亡くしてすべての感情と生きる意味を見失ったとき、それでも機械のように働き続けなければならなかったとき、自分の気力の底を見た。そのとき、物言わぬ樹木たちの、ただ天に

向かい続ける晴れ晴れとした意志に、力をもらった。

娘が亡くなった後に迷い込んできた白い子犬は、身代わりのように夫婦の心を癒してくれたが、新しい小さな家族の誕生によって居場所を追われたように出て行ってしまった。

夫婦なりに懸命に搜索すると、やがて娘の同級生のところに迷い込んだと連絡をもらい、ほっと胸をなでおろした。その少年が熱心に、預かりたいという申し出てくれた。夫婦は複雑な思いだったが、赤ん坊がアレルギー体質を抱えていたために、申し出を受ける決断をした。それでもときどき、この公園に来ると散歩する少年と白い犬の姿を見かけることができた。なついていた犬のことだから、元の飼い主である自分の姿を見れば、まっすぐに駆け寄ってくるに違いない。面倒を見てくれている少年にも、犬にも切ない思いをさせてはならないと賢治は慎重に身を隠した。

今日も隣家の老猫は、いつものように塀の上で丸まっていた。

「三太郎、おはようさん」

賢治の声にはわざとのようにビクとも動かないのだが、今日はどういう風の吹き回しか、頭をもたげて「にゃあ」と泣いた。

もう遅刻気味なので構ってるヒマはない。定ルートを抜けると、大銀杏が風もないのに大げさにさざめいたようだが、振り返るヒマもなく駅までの道を小走りに急いだ。

いつもの電車は、どうにか賢治を待っててくれた。始発駅なので、大抵は席が確保できる。メンツも毎日同じで、挨拶するわけでもないが、いつもの場所、いつもの立ち方、が暗黙に決まっている。

ぎりぎりにすべりこんだのだがいつもの座席は、賢治のために空いていた。会社の最寄駅までの4、5分間の読書のため、迷うことなく定席に身を落ち着けた。

ふと、隣席の制服に気がついた。

_____ たしか近所の中学校の...

フレックス通勤なので、普通の中学生はとっくに学校に到着してる時間でもある。

じろじろ見るのも中年のオジサンとして憚られたので、そのまま読みかけの本を開いた。

がたん、電車が動きだした瞬間。

_____ カロコラン

制服の少女のカバンの上で鈴が揺れた。

乾いた、心細い音が、賢治の記憶を叩いた。押さえきれない切ない気持ちだが、思わず声になった。

「その音、松阪の鈴じゃないですか」

それは、賢治が三重県の松阪という町に仕事で立ち寄ったときに、お土産に買ったものとまったく同じ茄子型の古鈴だった。土産用に画筆で簡単に赤い花が添えられている。

少女は賢治の方をふりかえらず、まっすぐ向いたまま答えた。

「そうかもしれません。もらったものなので」

「絶対そうです。僕も持ってるんですよ」

賢治がアタッシュケースから取り出した鈴は、少女のものとうりふたつ。

「実は、娘とおそろいなんです」

きっと妙なオジサンと思われてるだろうな、と思いつつ賢治は興奮を押さえることができなかった

____奏子が生きていたら、こんな年恰好だろう。

賢治は奏子が亡くなって以来、鈴を身体から離すことがなかった。この鈴の音がある限り、賢治の中に奏子は存在しているのだ。

突然、隣の少女が懐かしい声で言った。

「お嬢さんは、きっとお父さんのこと、大好きですね」

賢治の胸は熱くぼおっとなつて、声が出ない。やっとかすれた言葉を絞り出した。

「...娘には...嫌われてたんですよ」

それでも少女は一語一語念を押すようにくり返した。

「絶対、お父さんが好きですよ」

とてもとても長い間、賢治の心に沈んでいた重い錨を少女の言葉は軽々と持ち上げたのだった。代わりに力強い「気」が胸の底から沸き起こるのを感じた。

奏子と賢治の、宙に浮いたままだった関わりが、少女の言葉によって今やっと新しい力に変わろうと
していた。

しばらく賢治は目の前が晴れたような思いに放心していた。

やがて我に戻り、隣の席を振り返ったが、賢治はもう永遠に、少女の姿を見ることはないのだった。

